

教育広報

# 相 双

第123号

令和3年2月24日発行



### 『授業上達の方法とは』 方法とは』

相双教育事務所  
次長兼学校教育課長  
武口 隆行

授業上達の一歩の方法は何か？と聞かれたら、私は「よい授業を観て、そしてそれを真似ること」と答えます。

恥ずかしい話ですが、教師に成り立てのある日、先輩の教師から「もっと教科指導に力を入れて」と言われた経験があります。それまでの私は、教科書の内容を落ちなく教えることに授業の重要を置いていました。平板で単調な授業は、生徒にとっても決して楽しくはなく、学びがいのある授業とは言えなかったと思います。そのことがきっかけとなり、よい授業を目指して様々な授業研究会に積極的に参加するようになりました。

参観した授業の中には、生徒が主役となり、発言しながら進む優れた授業との出会いがありました。私は何とか真似しようと、同じ指導案を試したり、研究授業を行い、実践記録としてまとめたりと必死になつて実践を積み重ねました。その繰り返しの中で、少しずつ授業にリズムとテンポが生まれ、授業を受ける生徒たちの笑顔が増えていったのは確かです。

先生方の中には日々の授業に悩み、試行錯誤しながら実践されている方も少なくないと思います。また、各学校では「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められ、具体的にどのような授業をイメージすればいいのか教師間で共有できてい

編集・発行

福島県教育庁  
相双教育事務所

南相馬市原町区  
錦町1-30

☎0244-26-1313(代)  
<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/70610a/>

ない現状があるかもしれません。特に若い世代の先生方にはよい授業を本手とし、板書や発問、語り口調、間の取り方までまるごと真似ることから始めてほしいと思います。

本年度、学校教育課では、コロナ禍にあつて、授業研究会の機会が少なくなる中、「オンデマンド配信型 学級・授業づくりWebセミナー」においてコアティーチャーやふくしま外国語教育推進リーダーの優れた授業を動画として配信しています。先生方の感想から担当指導主事も手応えを感じており、来年度以降もさらに充実させていきたいと考えています。授業動画を繰り返し視聴することで自分流の授業を構築できる先生が増えていくことを願っています。



### ◇教育随想◇

『震災から十年、そして・・・  
不易と流行』

双葉町教育委員会  
教育長 館下 明夫



時の経つのは早いものです。東日本大震災並びに福島第一原子力発電所事故から十年。避難を余儀なくされた被災地を代表し、これまで、県内外において区域外就学を受け入れて頂いている各自自治体の教育委員会様に改めて感謝と御礼を申し上げます。

さて、各自自治体による震災復興と原子力災害からの復興の時間軸に大きな変化が表れ、双葉町では、極少人数教育の課題に直面しているのが現状です。学校教育では、「命の大切さ」をベースに「生き抜く力」を育てることを目標としています。これまでに、児童生徒のニーズに合わせ、物的・人的にも学ぶ環境

の範囲を広げ、地域の良さを生かすことで、児童生徒が新たな教育活動に取り組み成果を上げることができました。

ところが、令和二年に起こったコロナ禍の影響により、あたりまえの事があたりまえにできなくなり、改めて、「学校教育のあり方」を問われることとなりました。コロナ禍の状況は、未だ、日本を含め世界中でも収束の見通しが立たず、感染拡大の懸念が叫ばれております。「正しく学んで、正しく恐れる」という原発事故後もうたわれた言葉の再認識や、目に見えない恐怖と再び向き合い対応している現状は、震災時の混乱を想起させます。

そのような社会の変化に合わせ現在取り組まれているオンライン授業やICT機器活用の推進状況は、学校に新たな「流行」の流れをつくっています。まさに教育の大きな変革期にきていると感じます。

だからこそ、学校教育の本来的役割「不易」の部分をしつかり見据え確認しながら、新たな学校教育に取り組み大切さを感じます。



「学びの時代」に  
向かう未来の  
教育を相双から

『人権教育の  
取組について』

広野町立広野小学校

教諭 猪狩 香奈

今年度、広野町が人権教育総合推進地域に指定され、本校では、人権が尊重される活動・関係・環境づくりに力を入れ、人権教育の基盤づくりに取り組ましました。

人権が尊重される活動として、「一人一人が尊重され、互いのよさや可能性が発揮できる活動」と捉え、特に「安心感・期待感・困り感・必要感・達成感」の五つの「感」を引き出す授業づくりに重点を置き実践してきました。

引き出した子どもたちの「感」やそのための手立てを明確にし、具体的に子どもたちの姿や心の状態を想像しながら、授業を構想することができました。

人権が尊重される関係を、「互いのよさや可能性を認め合える関係」と捉え、人間関係づくりに取り組みました。Q・Uテスト分析結果を生かしながら、教材や活動を検討し

全校で共通の活動に取り組む、子どもの人と関わる意欲や社会的スキルを強化することができました。

人権が尊重される環境を、「安心して過ごせる学校・教室環境」と捉え、人権教育の視点に立った学習環境、校内環境づくりに取り組んできました。「ひろのっ子聴き方・話し方」モデルや友だちへの温かな言葉、感謝の手紙等の掲示、行事を振り返る掲示物に努力や成長を称賛する言葉を添える取組を行いました。そうすることで安心感や達成感を高め、自己肯定感、自己有用感の向上を図りました。

これらの取組の結果、子どもたちの相互理解の深まりや安心感の高まりが見られ、人と関わる意欲や自己肯定感が向上しました。その一方で、自分の行動や気持ちに自信がもてなかったり、表現することとをためらったりする児童が見られることも事実です。Q・Uテストの結果からは、例えば関わりスキルが高くとも、配慮のスキルが著しく劣るため不和が生じ易いなど、細かな個々の実態が見えてきています。学級や児童一人一人の実態に応じて効果的な手立てを検討すると共に、それらを学校全体としての人権教育の取組につなげ、子どもた

ちの人権意識をさらに高めていけるようにしていきたいです。



こども園との交流活動（広野小学校）

『キラリ☆タテ持ち制  
で授業改善!』

南相馬市立原町第二中学校

教諭 高橋 里沙

今年度、本校では五教科で「教科タテ持ち制」を取り入れ、授業改善を進めてきました。「教科タテ持ち制」を効果的に実施するために、始めに行なったことは、教科経営計画の整備です。生徒の実態をリサーチし、目指すべき目標を決め、達成のためのプランを立て、評価指標に沿って振り返ることができるようになりました。これによって、教科内で目標とプロセスを共有するとともに、日々の授業改善

を単元全体の改善に、そして、一年間の指導の改善につなげることができました。

教科経営計画を推進するにあたって、教科部会を時間割上に位置づけ、毎週定時に開催しました。教材研究を中心に、指導法や評価等に関する議論、定期考査の作問、授業の検証等を行いました。職員室の一角ではいつも授業づくりの話が行われていて、とても刺激になりました。

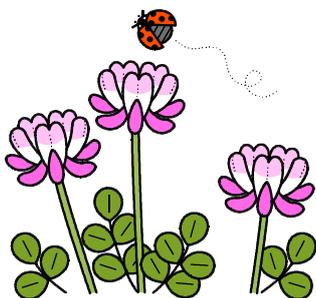
各教科部会を統括するのは学習指導委員会です。管理職と五教科の教員各一名で構成され、毎週火曜三校時に開催し、教科経営計画の進捗状況の確認やテスト結果の分析、校内研修の企画・運営など、学力向上ブランドデザインに基づき具体策を推進しました。

こうした取組の成果は、生徒による授業評価に表れています。本校では授業改善の達成状況を把握するために、「ふくしまの『授業スタンダード』」に基づく項目（課題やめあてがはっきりしているか、授業はよくわかるか、まとめや振り返りを行っているか等）を設定し、生徒を対象にアンケートを行ってまいります。今年度は、八つの項目全において、昨年度を上回りました。また、教員からは、

教員同士の学び合いが進んだことや、他学年の生徒の実態把握ができたことを評価する意見が多く聞かれました。一方で、教材研究が増えることによる多忙感や、所属学年生徒との関係が希薄になるという課題も残りました。今後は、こうした課題を一つ一つ克服するとともに、教員同士が学び合う環境づくりをより一層推進し、さらなる授業改善と学力向上につなげていきたいと思えます。



数学科教科部会の様子（原町第二中学校）



### 『地域と共に生きる 学校を目指して』 福島県立相馬支援学校

校長 鈴木 龍也

本校は、昭和四十六年に「相馬市立相馬養護学校」として開校し、今年で創立五十年を迎えました。その間、平成二十二年に県立移管し、平成二十九年には、「福島県立相馬支援学校」と校名を改め、現在に至っています。今年度の在籍児童生徒数は、小学部二十四名、中学部二十六名、高等部五十九名の計百九名です。現在、小中学部を対象に二台の通学バスを運行するほか、保護者送迎や公共交通機関を利用した自力通学により、新地町から南相馬市小高区までの範囲から毎日元気に通学しています。

このたび、待望の新校舎が南相馬市鹿島区に完成・移転し、新たなスタートをきりました。これまでなかった校庭や体育館では、体育の授業だけでなく、朝のトレーニングや高等部の部活動、各種学校行事などを、広々とした空間の中でダイナミックに実施しています。水治訓練室では、障がいの重い児童生徒の自立活動を、生活訓練室では、中学部の宿泊学習を行います。

た。施設設備の充実により、児童生徒の障がい特性や学習課題に応じた、適切な学習を行うことができるようになりまし。

移転に伴い、これまでの学校教育目標の見直しを行いました。本校が育成を目指す資質・能力を明確にし、その具現化のための学校教育目標と教育課程を整理し、日々の授業実践を行っています。各授業の単元案を作成し、各教科の目標・内容を踏まえ、「習得・活用・探究」の展開や、目標に準拠した適切な評価を行いながら、系統的・段階的に学習を積み重ね、基礎的な学力の定着・向上を目指した授業の質の改善に努めています。

今後は、感染症対策を十分にしながら、地域の行事へ積極的に参加するなど、多くの方々との交流及び共同学習の充実を図り、地域に理解され、また地域を支える人材の育成を目指してまいります。今後とも、どうぞよろしくお願いたします。



生活単元学習（相馬支援学校小学部）

### 『相双の復興・創生を目指して』 （北から南から）

### 『コロナ禍の中の笑顔』

相馬市立中村第一小学校

教諭 菅原 央

「先生！器楽部はいつから始まりますか？」と、分散登校初日に部員から質問がありました。先が見通せず「一日も早く、みんなと音楽を作りたいね。」と答えたことを覚えています。

六月からの部活動再開を子どもたちに伝えると笑顔がこぼれ、その表情はやる気に満ち溢れていました。真夏でもマスクをし、こまめに換気を行い、密にならないように距離をとって合奏するなど、感染症対策を徹底しながら練習



に励んでいる中、毎年参加していたコンクールの中止が決まりました。頑張ってきた子どもたちに残念な思いをさせたくないと考え、初挑戦となる「日本学校合奏コンクール ソロ&アンサンブルコンテスト」への参加を決めました。録音による審査は初めての経験のため不安もありましたが、一発勝負のコンクールと違い、納得できる演奏で参加できることをプラスと考え、何度も録音を繰り返し、子どもたちと話し合いながら完成度を高めていきました。練習の成果が実を結び、全国大会への切符を手にすることができました。十一月の本番では、千葉県文化会館のホールいっぱい弦楽の音を響かせる「金賞」と二位に相当する「千葉県教育長賞」を受賞しました。思うように練習できない日々が続きましたが、音楽を愛する仲間と、気持ちと音を一つに重ね、根強く練習に取り組んだ子どもたちの頑張り、大きな拍手を送ります。ブラボー！



器楽部の子どもたち（中村第一小学校）

### 『温故知新』

双葉町立双葉中学校

教諭 伊藤 要子

今年で東日本大震災から十年です。本校も、いわき市で学校を再開して七年になりました。当時二、三歳だった子どもたちが、今や中学生として学校生活を送っています。

そのような中、総合的な学習の時間は、各学年のテーマに地域学習を盛り込んで取り組んでいます。彼らは双葉町で過ごした期間が短く、記憶も僅かなため、故郷について学ぶことは、とても大切なことだからです。また、双葉町を「自分事」として考えることは、将来を考えたときの根幹になると思っています。

そのために、総合的な学習の時間では、「双葉町」について各学年全員が個人テーマを設定し、時間をかけ調査探究していきます。震災後の現状に課題を見つける者、双葉ゆかりの職業人や福祉関連に着目する者、歴史や伝統芸能に関心を示す者など、テーマは様々です。探究していく過程では、町役場の方々の協力を得て関係者に取材したり、学校に来ていただいて講演や体験をさせていただきました。同時に一人一台のタブレットで調べ学習を進め、まとめたことを、



双葉ダルマの紹介  
(双葉中学校)

校内文化祭やふるさと創造学サミットで発表します。見ていただくことで双葉町を知ってもらい、自分たちも理解をさらに深めることができるのです。

これからも、学びの上に、子どもたちの創意工夫が加わって、双葉町の未来に新たな一歩が刻まれることでしょう。

### 『地域と共に歩む 相馬農業高校』

福島県立相馬農業高等学校  
教諭 渡部 秀哉

「やーれこら、やーれこら。」生徒たちの元気な声が校内に響き渡る。九十有余年、伝承している郷土芸能を今年も無事に開催することができた。本校が誇る郷土芸能は、地域と共に守り続けてきたものである。

学校運営ビジョンに「地域から信頼される学校づくりの推進」を掲げているため、コロナ禍により生徒たちの活躍の場が制限されたことは、本校にとって大きな痛手となった。しかし、その中でも地域

との繋がりを大切にした取組を感染防止に努めながら実施することができた。

高校生が児童生徒に教える立場になり、主体性や思考力が高まる「生徒が先生」等の交流事業は、例年通りの成果を残した。また、地域に生産物や加工品を販売する「相農ショップ」等の販売会を通じて、フェイスシールドやゴム手袋の着用など、感染予防対策の重要性を生徒自身が身をもって体験した。そして、コロナ禍でも地域に元気を与えたいという生徒の発案で、JR原ノ町駅にフラワーアートを設置し、生徒の思いを発信した。コロナ禍での地域交流や明確な目的意識と責任感を

養わせることになった。これからも相馬農業高校の伝統を大切にし、地域で活躍する生徒を育成できるような、地域と共に歩む学校でありたい。



伝統芸能(田植踊)  
(相馬農業高等学校)

### 『ふくしまを十七字で奏でよう絆ふれあい支援事業』

ゆかた着て 今年はお家で 夏まつり  
(相)大野小 三年 新開 心優希  
いらっしやい! 今年初の 家まつり  
母 新開 恵理子

「大じょう夫?」こまっっていると 母がくる  
原町二小 四年 高倉 実花  
「手伝うよ」今は私が 助けられ  
母 高倉 佳愛

いつだって 辛い顔なし 母女優?  
石神中 三年 遠藤 美涼  
演技なし 我が子の笑顔 親の幸  
母 遠藤 美智子

花火見て 笑顔の祖母と 語り合おう  
石神中 三年 中塚 優奈  
濡れ縁に 集う孫らと 夕涼み  
祖母 中塚 よね子

朝早く みんなで浜辺 ゴミ拾い  
(相)大野小 二年 木幡 悠馬  
セミが鳴き もう三度目の海開き  
父 木幡 賢太郎

浜通り 新たな産業 期待して  
母 後藤 文絵  
未来への ふくしまつなぐ ロボットよ  
原町三小 五年 後藤 葉月

橋や道 いろんな施設 できていく  
新地小 六年 森 巨輝  
ああ確か ここは駄菓子屋 あった場所  
母 森 亜由美

時が経ち 復興導く 桜道  
ふたば未来学園中 一年 鈴木 里桜  
娘の名 由来の並木 永遠に咲く  
母 鈴木 友紀

風にのる 電車の音は 復興音  
尚英中 二年 但野 紗弥  
この音は 明日につながる 希望の音  
尚英中 二年 名取 沙彩

◇編集後記◇  
お忙しい中、原稿をお寄せいただいた皆様に厚く御礼申し上げます。